

第122回日本皮膚科学会総会 を終えて

(2023年6月1～4日)

※パシフィコ横浜とWeb配信のハイブリッド開催

山下 尚志, 吉崎 歩, 佐藤 伸一
東京大学大学院医学系研究科皮膚科学

はじめに

2023年6月1日～6月4日に、東京大学皮膚科学教室を主催校とする第122回日本皮膚科学会総会がパシフィコ横浜で開催されました(会頭:佐藤伸一, 事務局長:吉崎歩, 実行委員長:山下尚志)(写真1～

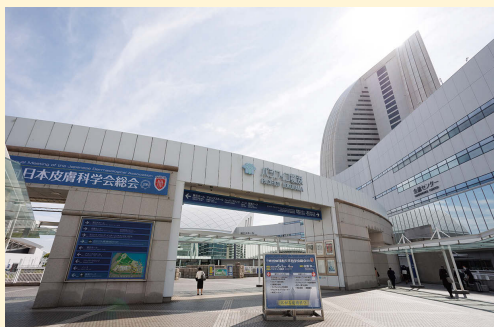


写真1 会場のパシフィコ横浜



写真2 大会ポスター

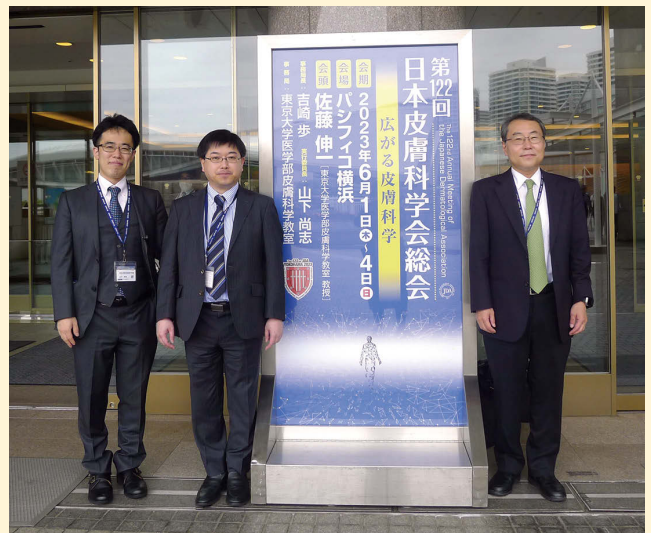


写真3 写真右から会頭の佐藤伸一先生, 事務局長の吉崎歩先生, 実行委員長の山下尚志

3). パシフィコ横浜での開催は第120回から2年ぶりとなり、開催形式は前回と同様に現地参加とオンライン参加を組み合わせたハイブリッド形式となりました。コロナ禍によって、多くの学会がオンライン形式やハイブリッド形式で開催されるようになり、日本皮膚科学会事務局にも多くのノウハウが蓄積されており、同時に参加者の皆様の温かいご協力も得て、スムーズな総会運営を行うことができました。この場をお借りして、皮膚科学会事務局をはじめ、総会準備と当日の運営に携わってくださった皆様、そしてご参加いただいたすべての方々に心からの御礼を申し上げます。

テーマ: 広がる皮膚科学

今回の総会では、テーマを「広がる皮膚科学」とい

たしました。新型コロナウイルス感染症の流行をはじめとする不安定な社会情勢の中であっても、科学のたゆまぬ進歩に伴って医学の世界も不断の発展をみせています。皮膚科学の領域においても、複数の疾患に新たな治療法や検査法がもたらされており、今後、ますますの皮膚科診療の進展が期待されます。今回掲げたテーマには、従来の枠組み、また科としての垣根を越えて拓がる、皮膚科学の新しい可能性を感じていただきたいという想いを込めました。



写真4 会頭特別企画1: Christopher Denton先生 (University College London)



写真5 会頭特別企画7: Dinesh Khanna先生 (University of Michigan)



写真6 会頭特別企画2: 北森武彦先生 (台湾・国立精華大学)



写真7 会頭特別企画3: 熊ノ郷淳先生 (大阪大学)

学術プログラム

会頭特別企画として国内外の7名の著名な先生方に、科学・社会に関する最先端のテーマについてご講演いただきました。以下に内容をご紹介します。

治療開発が注目されつつある全身性強皮症から最新の話題として、講演1ではChristopher Denton先生 (University College London) (写真4)、講演7ではDinesh Khanna先生 (University of Michigan) (写真5)にご講演いただきました。

Denton先生からは「全身性強皮症における病態の多様性と治療応用の可能性」についてご講演いただきました。全身性強皮症は多様性に富む疾患であり、これが病態理解や治療開発のむずかしさの一因になっていますが、本講演では、特定の遺伝子多型が自己抗体のパターンや合併症のリスクと関連することをご解説いただき、その多様性の理解につながる最新の研究結果を多数お示しいただきました。

Khanna先生からは全身性強皮症に対する臨床試験の設計の大切さや評価方法、実際の試験の結果をわかりやすくご解説いただきました。このお二

人の先生は世界的な臨床試験を手掛けておられ、全身性強皮症に対する新規治療法の開発への熱意と、患者さんに対する温かさを感じることでできる素晴らしいご講演でした。

講演2では北森武彦先生(台湾・国立精華大学) (写真6)に「大規模直並列マイクロ流体デバイスシステム」についてご講演いただきました。マイクロ流体デバイスはナノレベルの実験室ともいえるものであり、サイトカインや微量蛋白など通常の検査機器では検出感度以下のものを測定できるデバイスです。さらに測定のみならず、ナノデバイス内の時空間均一性という特性を活かし、高純度の化合物を短時間で合成可能であることをご解説いただきました。この技術は医工連携研究にも用いられており、半導体の小型化が世界を変えたようにマイクロデバイスが医療の世界を変えつつあることが目に浮かぶようでした。

熊ノ郷淳先生(大阪大学) (写真7)には講演3として、「免疫研究と臨床応用」について、自然免疫と獲得免疫の理解から、抗体製剤やリンパ球をターゲットとした新規治療法、そして免疫を介した臓器間の連携についてご解説いただきました。さらには



写真8 会頭特別企画4: 迫井正深先生(内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室)



写真9 会頭特別企画5: 五神真先生(国立研究開発法人理化学研究所)



写真10 会頭特別企画6: Katia Georgopoulos先生(Harvard Medical School)



写真11 土肥記念国際交換講座: James G. Krueger先生(Rockefeller University)

血管炎を例にsingle-cell RNA Seq解析を用いた患者の層別化についての展望や免疫学の歴史を含め、基本的なところから最新のトピックまで幅広く学ばせていただきました。

講演4では迫井正深先生(内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室)(写真8)に行政の立場から、コロナパンデミックで明らかになった日本の医療の課題点とその解消のために現在進行中の政策についてご講演いただきました。われわれが医療従事者としてコロナパンデミックで身近に感じた、医療インフラ拡充の重要性、リモート診療などのデジタル技術の必要性、さらに、働き方改革も含め、医療を取り巻くさまざまな事象を多岐にわたって考える機会となった講演でした。

講演5として五神真先生(国立研究開発法人理化学研究所)から、「Society5.0への変革を駆動する知の創造」(写真9)のテーマで、科学をいかに社会へ活用していくかについて、ご自身のこれまでのご経験に基づき、さまざまな科学・社会の領域にわたる壮大なお話をいただきました。とくに印象深かったのは、近年、技術革新はめざましく進んでおり、人類の科学は地球の環境を変えてしまうほどとな

り、その一例として地球温暖化が進んでいること、その一方で、科学の発展こそが社会のあり様と地球環境をよい方向に導くことができるというメッセージでした。そして、皮膚科学は低い侵襲度でデータを収集できる領域であり、持続的なデータ収集とその解析を通して、皮膚疾患のみならず人々の健康維持全般に寄与できる可能性をご提言いただき、われわれ皮膚科医にとって大きな励みとなりました。

講演6ではKatia Georgopoulos先生(Harvard Medical School)(写真10)に、表皮細胞における転写因子とエピジェネ

ティクスについてご講演いただきました。表皮細胞のエピジェネティックな変化が皮膚の異常をひき起こしていることや、クロマチン構造における蛋白質因子の重要性と、それに対する先進的な解析アプローチ法については、新たな治療ターゲットの登場を予感させるものでした。

今年の土肥記念国際交換講座はJames G. Krueger先生(Rockefeller University)(写真11)にIL-17ファミリーサイトカインの皮膚疾患における役割について解説いただきました。IL-17ファミリーサイトカインの機序の研究、そしてそれを発展させていまや乾癬治療としてあたり前のように使われている生物学的製剤をいかに誕生させたのか、ヒト臨床検体および培養ヒト細胞を通した、bench to bedside/bedside to benchのダイナミックなKrueger先生の研究者としての流れを学ぶことができました。

最後に一般参加でのご発表状況についてもご報告させていただきます。今回の総会では、一般演題399演題、英語演題64演題と、多くの方々からのご発表をいただきました。その中から座長と学術委員により、優秀演題賞18題(一般演題14題、英語演



写真12 賑わいをみせた展示ブース

題4題)が決定されました。受賞された先生方、本当におめでとうございます。

おわりに

今回の総会の準備を開始した時点では、新型コロナウイルス感染症は猛威を振るっており、先行きは極めて不透明でありました。このような背景から、さまざまな状況に柔軟に対応できるように、今回も現地とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式として、開催準備を進めることとなりました。しかしながら、懇親会をはじめとする多くの方々のご参集が予想される企画は、参加者の皆様の安全を第一に考えると今回も断念せざるを得ませんでした。このため、現地でのご参加は少なく、オンライン学会疲れした方々にもご参加いただけ

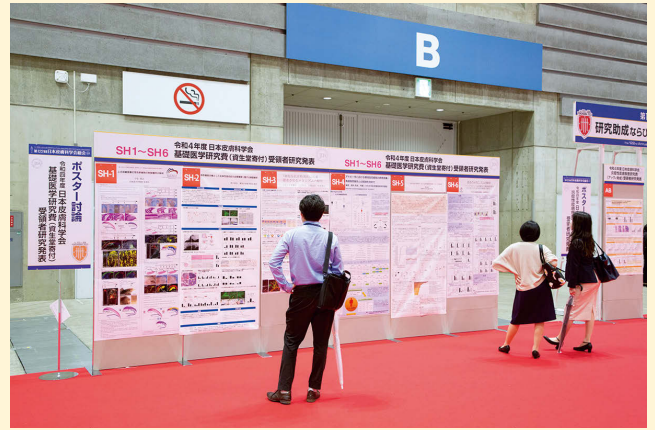


写真13 ポスター演題

ないかもしれないとたいへん心配しておりましたが、開催前月である5月には、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に分類されたこともあり、現地来場者4,041名、総参加登録者7,716名と多くの方々にご参加いただくことができました。会場や展示ブースの賑わいもコロナ禍以前の活気を取り戻したかのようで、さまざまな形でご交流いただけたのではないかと考えております(写真12, 13)。今回の総会を通じて「広がる皮膚科学」を感じ、今後の皆様の皮膚科学を広げていく一助となりましたら幸甚です。

最後に改めまして、ご参加いただきましたすべての方々、ご協力いただきました企業の方々、そして大会運営にご尽力いただいた日本皮膚科学会事務局の皆様にご礼申し上げます。